INAF・早稲田大学東アジア国際関係研究所
共同国際シンポジウム
「近現代日中関係への多角的な視点」
早稲田14号館102教室
2022.10.22

報告テーマ:
中国のトップリーダーの対日認識と日中関係
ー毛沢東時代から習近平時代までの変遷ー

発表者:李　鋼哲
一般社団法人・東北亜未来構想研究所（INAF）
北陸大学経済経営学部

問題意識

＊日中関係は日本の過去、現在および未来の存続にとって常に対外関係の重要な軸である。

＊戦後の日本の対中認識や対中外交（政府や国民）には常に重要な落とし穴、つまり、中国および政権の実態を知らなさすぎる。贖罪意識に加え、マスコミの対中国報道は常に実態とかけ離れている面が強い。

＊その根源にあるのは、中国共産党およびそのリーダー達の対日認識およびそれに基づいた対日「統一戦線工作」の影響を大きく受けていること。

＊『孫子兵法』には、「彼を知り己を知れば百戦殆うからず」という重要な戦法がある。また、中国の諺には「害人之心不可有，防人之心不可无」（他人に被害を与える心は持つべきではない、他人を警戒する子心はなくてはならない」というのがある。

＊日中関係の現在を知り、未来の良好な関係を構築するためには、中国共産党の政治や戦略の実態を知るとともに、必要な警戒心も持つことが大事である。その上で真の信頼関係は構築できる。

報告の流れ:

はじめに

I. 毛沢東時代:1930年代～1976年:建国前と建国後

II. 華国鋒時代:1976～80年

III. 鄧小平(胡耀邦＋趙紫陽)時代:1978～80年代末

IV. 江沢民時代:1989～02年

V. 胡錦涛時代:2002～12年

VI. 習近平時代:2012～現在

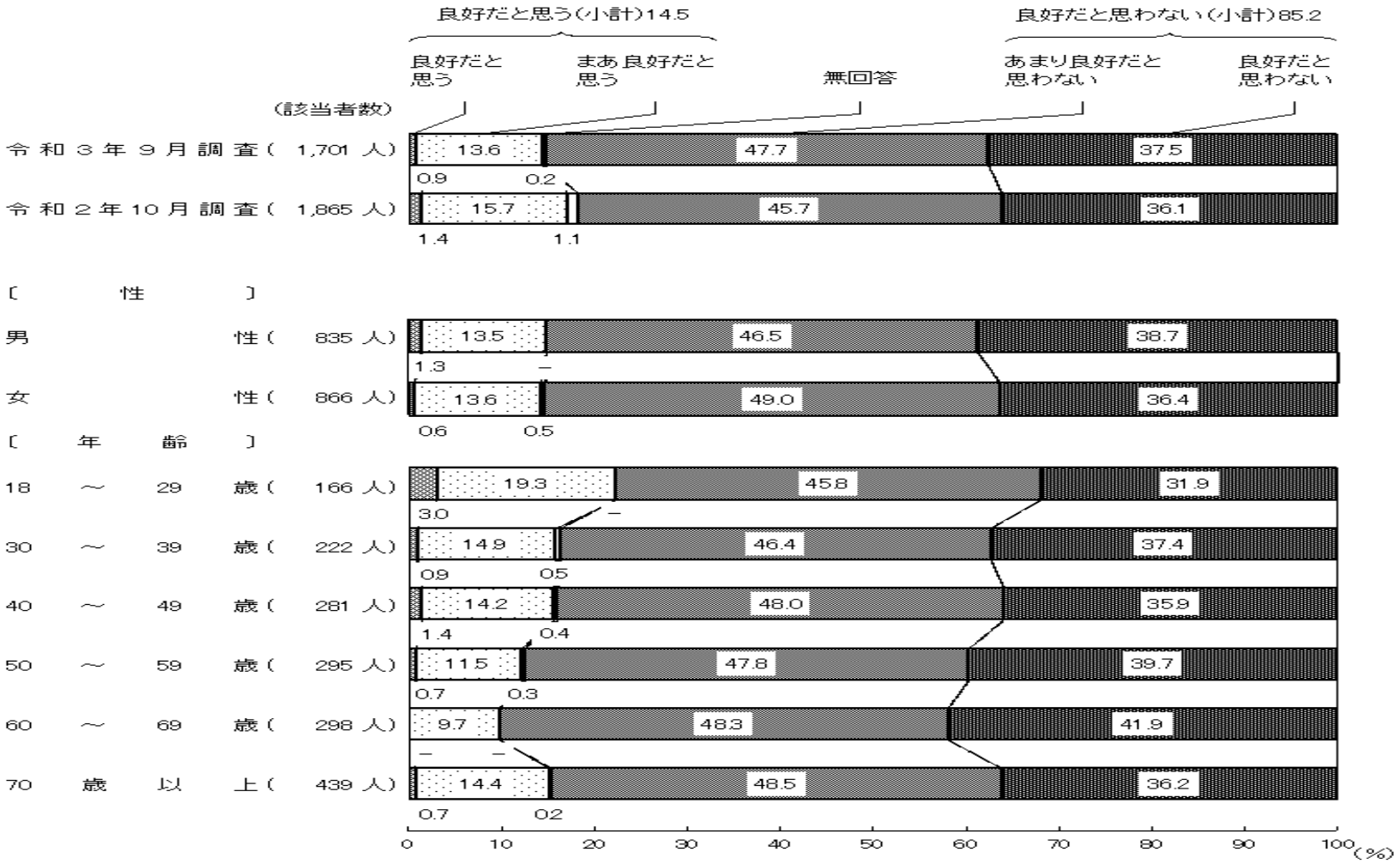
VII. まとめと結論:日中関係の問題点と課題

キーワード:

統一戦線工作，大外宣、マルクス･レーニン主義、毛沢東思想、プロレタリア(無産階級)革命、世界革命、思想改造(洗脳)、思想解放

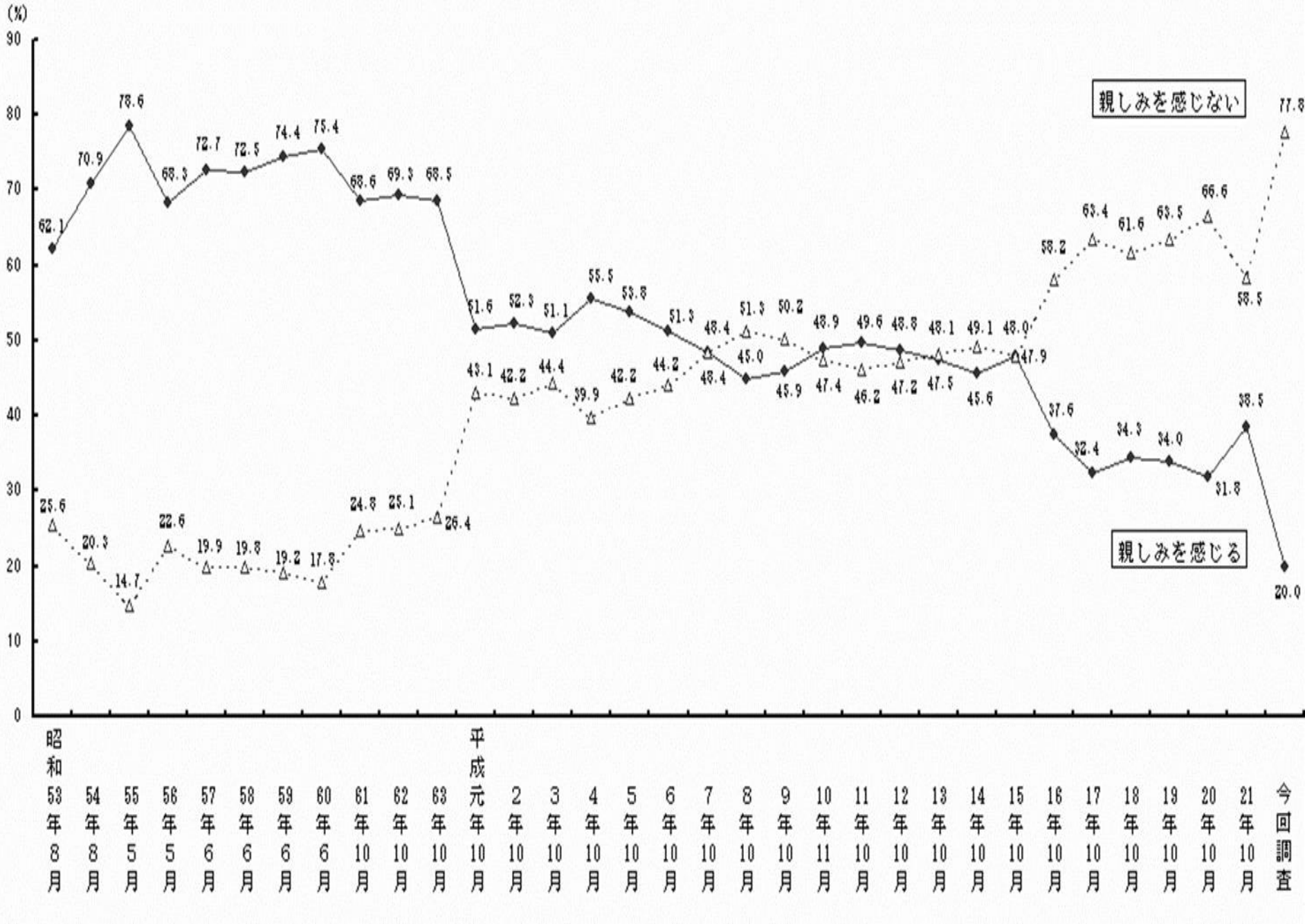
はじめに：日中関係に関する世論調査

図８　現在の日本と中国との関係

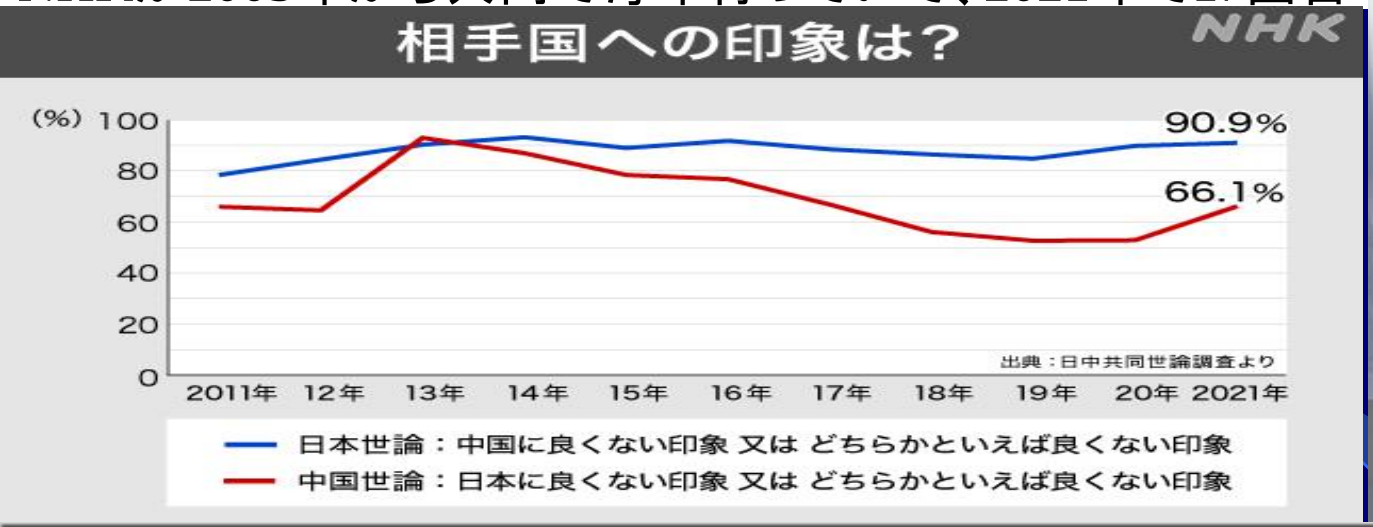


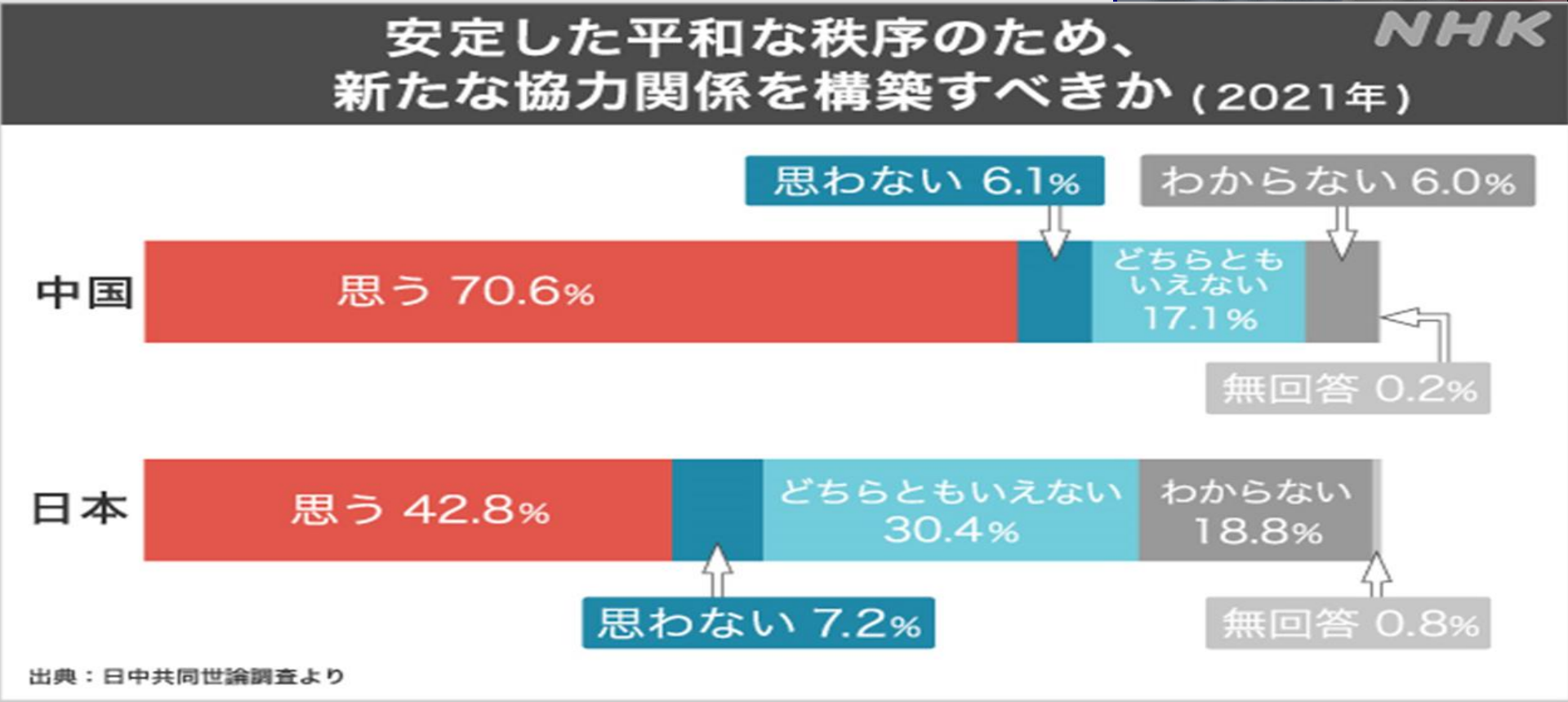
内閣府『世論調査報告書』令和3年9月調査（https://survey.gov-online.go.jp/r03/r03-gaiko/index.html）

図10　中国に対する親近感



NHKが2005年から共同で毎年行っていて、2021年で17回目





Ⅰ．毛沢東時代：建国前

昨年、中国共産党は創立100年を迎えた。

この100年間、革命時代と国家建設時代に分けられるが、いずれの時代も日本との関りのあり方が、共産党にとって重要な課題の一つであった。

とりわけ、毛沢東が共産党のトップ、そして政権のトップの座にいる時代には、彼の対日観が日中関係に及ぼす影響はとっても大きい。

毛沢東が亡くなった後の56年間の中国共産党の対日観および対日政策は、基本的に毛沢東が取った「統一戦線」路線を踏襲するものであった。

＊毛沢東を始めとする中国共産党の基本路線は「プロレタリア革命」路線というものであった。

＊それはマルクス、レーニン主義の思想に基づく、全世界で共産主義を実現することを目標とする、そしてそれを実現するための革命路線であり、その重要な方法の一つは「統一戦線工作」であった。

Ⅰ．毛沢東時代:建国前

中国共産党は、100年前の7月16-23日，中共は第2回大会を上海で開催し、「“民主的聯合戦線”に関する決議案」を提示，統一戦線政策を正式に決めた。

「大団結」･「大連合」は統一戦線の本質的要求であり、

マルクスの『共产党宣言』では、

「万国の無産者（プロレタリア）は聯合せよ」という著名なスローガンを提示、これこそが無産階級の統一戦線の本質であった。

豆知識:

中央統戦部:

1942年に中国共産党は中央統一戦線工作部（UFWD）を設立、党中央委員会の直属で、党外各民主党派（衛星政党）との連携を担当する機構としていた。

文化大革命中は業務が停止、1973年6月に復活。

民族、宗教についての業務、海外における祖国統一工作、非共産党員の幹部養成。業務の性格上から全国政治協商会議と連携が多い。

Ⅰ．毛沢東時代:建国前

三大法宝:

1939年10月，毛沢東は《(共产党人)発刊の辞》のなかで、

2回の国内革命戦争の経験と教訓を総括し、中国革命の法則を示す。

「統一戦線、武装闘争、党の建設は中国共産党が中国革命で敵に勝つ三大法宝である」。

「統一戦線と武装闘争は敵に勝つ基本武器である。

統一戦線は武装闘争のための統一戦線であり、

党の組織はこの二つの武器を手に掌握し、敵陳に立ち向かう勇ましい戦士である。

これは3者の相互関係である。

このことを正しく理解してこそ、中国革命のすべてをリードできる」。

＊このことを正確に理解してこそ、共産党中国を理解できると筆者は考えている。

Ⅰ．毛沢東時代:建国前

「統一戦線」とは？

それは中国共産党の行動原理の一つであり、それを理解せずに中国共産党および現代中国を理解することはできない。

また、中国対外政策の基底にある思想はまさに「統一戦線工作」に他ならない。

同時に、それは毛沢東革命思想の重宝である。

したがって、毛沢東時代の対日観および対日政策は、この「統一戦線」思想と関連付けて見ないと理解できないだろう。

わかりやすく解釈すると、「統一戦線工作」というのは、

対内的には、団結できるすべての人々、派閥や組織（政治勢力）を団結し、敵対勢力と向き合えば、必ず勝つという考え方である。

対外的には、世界の団結できるすべての国、政党、勢力、人民（プロレタリア）と団結することによって、中国革命および世界革命（共産主義）という目標を実現する手段であり思想である。

Ⅰ．毛沢東時代：建国前

実例としては、

1924年の第1次「国共合作」：

国民党と共産党の協力関係を構築。孫文の「聯俄、聯共、扶助工農」（ロシアと連携し、共産党と連携し、労農を助ける）政策の産物。これは国民党主導の合作枠組み。

1936年の第2次「国共合作」：

抗日統一戦線の構築。「西安事変」をきっかけに、共産党主導の統一戦線枠組みが形成された。

戦後の対日戦略と政策：

毛沢東および共産党は、戦後の中国において米国は主敵であり、米国のコントロール下にある日本は「団結」の対象であり、統一戦線工作の対象であった。

Ⅰ．毛沢東時代:建国前

毛沢東の対日観と対日政策:

抗日戦争のための国民党政府との統一戦線を結ぶ一方で、

毛沢東は日本軍との秘密の協力関係を構築していたことが、最近の研究で明らかになった。

毛沢東はプロレタリア革命の戦略に基づいて、未来の共産主義革命勝利のためには、蒋介石の国民党軍に日本と戦わせ、その勢力を弱めてから、共産主義政権を構築する戦略とビジョンを考えていた（毛沢東「論持久戦」）。

毛沢東は1940年に「十八軍団」に対して講演し、「七、二、一」戦略を提示した。つまり、7割の力を共産党およびその軍隊の成長にいれ、2割の力を国民党への対抗に用い、日本軍への抵抗には1割程度の力しか費やさないという戦略。

Ⅰ．毛沢東時代:建国前

その目的を達成するために、毛沢東は上海にある岩井公館（日本外務省の特務機関）を利用して、潘漢年、袁殊などスパイを通じて、日本軍に対して国民党政府軍の情報を提供し、日中戦争で国民党軍を疲弊させ、漁夫の利を得た、という研究がある。

毛沢東の統一戦線戦略は見事に成功し、結局は１９４９年１０月に国民党から政権を取り、中華人民共和国を建国した。

建国後にそれに関する機密情報を知る者は、全て投獄され死亡。

（毛沢東の密令を受けてスパイ活動をした者1000人ほどを、一斉に逮捕し投獄。潘漢年は売国奴としてその口を封じられた１９５５年に投獄され、1977年に獄死、８２年に名誉回復。

出所：曾龍 (著)『我的父親袁殊：還原五面間諜的真實樣貌』Kindle版（2016）。

袁殊（1911年3月29日－1987年11月26日）。二十世紀三、四十年代に上海文化界、政界で活躍。かつて中共、中統、軍統、親日王政権、青紅帮５重身份を持つ。戦後1945年10月秘密里に蘇北解放区に入り、1949年に被李克農により中央情報部門で日米動向などの調査する仕事をした。1955年，「潘汉年案」に連座し、12年刑を受けて投獄、1967年満期になったとき文革が起き、再度8年間監禁、1975年5月に釈放以降には農場で労働改造を受ける。1982年に名誉回復、1987年11月26日北京で病死した。

Ⅰ．毛沢東時代:建国後

建国後の対日統一戦線工作:

１950年代、日本の左派勢力は日本共産党を中心に反米独立と民主化のために、社会主義には親和的であった。日本共産党は暴力革命路線の失敗によりの党勢が失墜していったため、中国共産党は「人民外交」と並行して「民間外交」方針のもと、55年には中央政治局が対日活動方針を打ち出し、政界・財界・文化界の民間友好団体や友好人士に向けた中国支持のための世論工作を積極的に展開した。　日中間の民間交流が活発になり、左派勢力だけでなく保守的なリベラリストの中にも中国共産党支持者が浸透していった。

出所:シリーズ・結党100年の中国共産党と日本(4): 戦後日本の「中国観」共感・支持の時代を経て悲観・独裁批判一色に、政治・外交 社会 2021.06.16　馬場 公彦

Ⅰ．毛沢東時代:建国後

毛沢東は日本に感謝:

『毛沢東外交文選』の記載によると、毛沢東は日本人に対して「侵略に感謝する」と直接に語っている。

1956年に日本元陸軍の遠藤三郎前中将と会談した際に、

「あなたたちは我々の先生であり、感謝しなければならない。戦争こそが、まとまりのない中国人民を団結させたからである」と述べている。

1961年1月24日、日本社会党の黒田寿男氏と会談した際、「日本帝国軍が中国大半を占領したことによって、中国人民は教育を受けることが出来た。日本の侵略が無かったら、我々は未だに山里に住んでいたことだろう。」と述べている。

続けて毛沢東は、「日本帝国軍が中国大半を占領したからこそ、我々は抗日基地を築くことが出来、後の解放戦争に勝利するための条件を整えることが出来た。日本軍閥は我々に『良い事』をしてくれた。感謝が必要であれば、日本帝国軍が中国を侵略したことに感謝する」と語っている。

Ⅰ．毛沢東時代：建国後

毛沢東の二分論（毛沢東哲学では「一分為二」）：

2014年12月13日、南京事件記念館式典で習近平主席はこう述べる。「我々はある民族（国）の中で少数の軍国主義者が侵略戦争を起こしたから、この民族を敵視すべきではない。戦争の罪責は少数の軍国主義者にあった、人民にはない」。

意味：「ごく一握りの軍国主義者」と「大半の日本人民」を区別し、前者にのみ戦争責任を追及すること。

意義：1950年代半以降の長年にわたって中国政府の対日基本政策基調になった。これは日中戦争中に形成。1980年代以降、論争が起こるがこの基調は変わっていない。

習近平時代に対日の基本方針として再び提起。

出所：「対日『二分論』―その内容・変遷と論争」（朱建榮：2017年12月7日報告資料）

＊毛沢東時代の対日観および対日関係は基本的に「世界革命」思想に基づいていた統一戦線工作であった。

Ⅰ．毛沢東時代（建国後）

私の体験：日本には好印象

＊小学生の時代に、抗日戦争の映画（農村での野外放映隊）をたくさん見てきたが、学校教育や社会の世論ではまさに「二分法」で、「日本の軍国主義が悪い」、「日本人民は中国人民と同じプロレタリアであり、憎みべきではなく、団結すべきである」という共産党の方針に基づいての教育だったので、日本に対する敵愾心や憎む気持ちはあまり持たなかった。

＊1972年9月、田中角栄総理大臣が訪中、交渉を経て、29日「日中共同声明」に調印、国交正常化。（そのような国家大事については田舎の子供としては知らなかった）。

　それ以来、日中関係は友好のムード：1978年頃から日本の映画、ドラマ・ブームが中国で起こり、日本語学習者が増え、実兄が78年に吉林大学日本語学科に入学。

兄貴の影響で、農村で働きながら、79年から大学受験のため私は日本語独学を始める。

Ⅱ．華国鋒時代

1976年4月30日、毛沢東から「あなたがやれば、私は安心だ（你办事，我放心）」という遺言にあたる自筆メモを入手したとされている。

同年9月9日、毛沢東が党主席在任のまま死去。

10月6日、文化大革命の主導者であった江青や張春橋らの四人組を逮捕。

これにより、毛沢東の死後に激化していた党内対立を一気に解決し、文化大革命を事実上終結させた。

1977年8月の第11回党大会において、1966年以来11年にわたった文化大革命の終結を宣言。

1978年12月に行われた第11期3中全会で、中国共産党のトップとしての実権を鄧小平に奪われ、1980年9月に首相を、そして翌1981年には党主席を辞任。

華国鋒の対日観は毛沢東の対日観を引き継いで、良好な日中関係をす推進する政策。

Ⅱ. 華国鋒時代

華国鋒:（1921年2月16日 - 2008年8月20日）は、中国の政治家。沢東死後の最高指導者で、中国共産党中央委員会主席、中央軍事委員会主席、国務院総理（首相）などを歴任。

1980年5月には日本を公式訪問して
大平正芳首相と会談し、昭和天皇と会見。 会談する大平首相（右）と華国鋒首相（首相官邸）

毛沢東に信頼され、1975年には国務院副総理（副首相）に昇進。1976年1月8日に周恩来総理が死去すると、毛沢東の意向により国務院総理代行と決定。 4月7日、毛沢東の指示に基づいた党政治局会議の決議により、華国鋒は後継の国務院総理兼党中央委員会第一副主席に任命され、毛に次ぐ序列第2位の地位に抜擢。

Ⅲ. 鄧小平（胡耀邦＋趙紫陽）時代：日中関係の黄金時代

1977～80年代末：日中関係の黄金時代

78年12月、共産党第11期第3回大会で、鄧小平は毛沢東の「階級闘争」路線を否定し、経済建設を中核とする改革・開放政策の実施で、政治・経済・社会の諸分野で活気が溢れる時代。

鄧小平の「黒猫白猫論」、「先富論」により、経済優先ムードに転換。79年2月には中越戦争（「自衛反撃戦」）のため、財政が厳しく、同年の大学入学生は激減（29万人）。

対外的には、鄧小平は1978年10月に日本を訪問し「日中平和友好条約」を締結。翌年1月には米国を訪問し、中米国交正常化を実現。

鄧氏は尖閣諸島問題に関しては、「争議を棚上げ、共同開発」を提案。この「棚上げ論」によって、80年代の日中関係は基本的に友好協力関係であった。

＊しかし、一方で鄧小平は靖国神社問題などで日本に批判的であり、全国に日本の中国侵略の記念館・記念碑を建立して愛国主義教育を推進するよう指示を出して、南京大虐殺紀念館を作らせた。

Ⅲ. 鄧小平（胡耀邦＋趙紫陽）時代：日中関係の黄金時代

1978年10月鄧小平氏の初訪日

鄧小平副総理は福田赳夫首相と会談

『中日平和友好条約』の批准書の交換

鄧小平は次のように述べる。

「中日間には、一段の不幸な歴史があり

、中国人民はきわめて大きな災難に遇い、日本国民が受けた損失も少ないとはいえません。しかし、これも二千年以上に及ぶ友好の歴史とくらべれば、やはりたいへん短い期間のものだったといえましょう。わたしたちは、前向きの姿勢で、未来に眼を向け、ともに努力して、中日両国民が世世代代友好的に付き合っていくことを願っています」

この訪日の5年後の1984年、鄧小平氏は北京を訪れた中曽根康弘首相に次のように話している。

「中日関係は長期的な角度にたって考慮し、発展させるべきです。第一歩は21世紀、そして22世紀、23世紀へと発展させていく、いつまでも友好的に付き合うべきです。このことは、わたしたちの間のすべての問題を超越する重要性を持っています」（『鄧小平文選』第三巻）。

Ⅲ. 鄧小平（胡耀邦＋趙紫陽）時代：日中関係の黄金時代

『中日平和友好条約』と覇権条項：

『鄧小平秘録』（下）（伊藤正、2012、p.116~7）によると、

1978年8月に日中両国政府は同条約を締結、10月22~29日の鄧小平の訪日はその批准書交換のためであった。これは「日中関係の新たな出発点」（鄧小平）になっただけではなく、彼の近代化戦略の出発点でもあった。

同条約は、そもそも72年9月の国交正常化交渉の時に締結を唱っていたが、1974年から交渉が始まり、いわゆる「覇権条項」の明記をめぐって難航した。

「覇権条項」には当時ソ連がソ連敵視として強く反対、中ソ等距離外交を取る

三木武夫政権は決断できず、福田赳夫政権の下でやっと妥結した。

1975年1月、鄧小平は元自民党幹事長の保利茂衆議院議員にはこう話した。

「我々は永遠に覇を唱えない。率直に言えば、我が国のような遅れた国に覇を唱えるような資格などあるだろうか。問題は30年、50年後、我々が発展した国になったとき、もし中国が覇を唱えたら世界の人民は中国人民と一緒に中国を打倒する責任がある」

Ⅲ. 鄧小平（胡耀邦＋趙紫陽）時代：日中関係の黄金時代

胡耀邦時代（1980年～86年）：

胡耀邦は、1980年2月に開催された第11期5中全会において、中央政治局常務委員・党中央書記処総書記に就任。

1987年1月に「資本主義自由化」の推進者として批判され、総書記を失脚、

89年4月15日に政治局会議の時に心臓発作で死亡。彼を追悼する北京の大学生や市民達のデモが発展して天安門事件に繋がった。

胡耀邦の時代は日中関係の蜜月時代：

胡耀邦の対日観は基本的に毛沢東の二分論と鄧小平の実用主義を踏襲した。

Ⅲ. 鄧小平（胡耀邦＋趙紫陽）時代：日中関係の黄金時代

1983年11月の訪日では、昭和天皇と会見して天皇訪中を要請（当時交渉を担当したのは胡錦濤）、日中首脳会談では中曽根康弘首相が、中国側の提示した3原則に「相互信頼」を加えて4原則にしたいと述べ、民間有識者からなる『日中友好二一世紀委員会』の設立を提案し、胡はこれに賛同。

他方胡は、日本青年3000人を中国に1週間招待するプランを披露して日本側を驚かせた。

『21世紀委員会』を1984年に発足、いわば「第2トラック」として日中間の問題の調整を行ってきた。また、中曽根首相は胡とは「兄弟のように非常に親しい仲だった」と述懐している。来日した際には中国の首脳として唯一広島の原爆ドームなどを視察。

（1979年2月に胡は「もし中国人民が我々中国共産党の歴史の真相を知ったならば、人民は必ず立ち上がり我々の政府を転覆させるだろう」とのスピーチをしている。中国共産党の表の党史には語られていない裏事実があることを遠藤誉氏は語っている。その「歴史の真相」については『毛沢東：日本軍と共謀した男』に書かれた）。

Ⅲ. 鄧小平（胡耀邦＋趙紫陽）時代：日中関係の黄金時代

胡耀邦総書記の対日外交4原則：

訪日の際、中曽根首相との会談で「平和友好、平等互恵、相互信頼、長期安定」という両国関係四原則を確立。

(1)中日は社会制度と価値観の差異を超えて真に平和共存を実現できる。

(2)例え、中国経済が発展しても政治上絶対に覇を唱えない、経済上は絶対に民族利己主義（ナショナリズム）に陥らない

(3)両国が政策と国益に矛盾がないわけではないが、アジア太平洋地域の平和と安定を維持することには完全に一致している

(4)中日友好の希望は両国の青年に託す——と述べた。

この対日観と対日関係の構築により、日本の対中国ODA規模は急速に増加

胡耀邦は、3000人の日本青年訪中要請は84年に実現（その時私は大学3年生、大学を訪問する日本人たちと「北国の春」を歌っていた）。

＊中曽根首相は1985年8月15日靖国神社を参拝し日中世論で批判を受ける。後に、自身の靖国参拝により中国共産党内の政争で胡耀邦総書記の進退に影響が出そうだという示唆があり、「胡耀邦さんと私とは非常に仲が良かった。」「それで胡耀邦さんを守らなければいけないと思った。」と述べている。その後は参拝をしていない。

Ⅲ. 鄧小平（胡耀邦＋趙紫陽）時代：日中関係の黄金時代

趙紫陽総理・総書記の活躍と悲劇：

1980年9月の第5期全国人民代表大会第3回会議で、国務院総理に就任、党総書記の胡耀邦と共に鄧小平を支える「車の両輪」と称せられた。

「天が落ちてきても2人が支えてくれる」と当時の鄧小平に言わしめるほど、鄧の2人に対する信頼は大きなものがあった。1981年6月の第11期6中全会で党中央委員会副主席に選出。

毛沢東時代以来の自給自足経済を改め、人民公社を解体するなど、農村改革で頭角を現した。

胡耀邦総書記のもとで総理として経済の舵取りにあたり、

1987年9月に胡耀邦の後任として総書記となるが、自由化や民主化に傾く趙紫陽や胡耀邦に対し、保守派長老たちの不満を買い、

鄧小平などにより、天安門事件前の89年5月に失脚（解任）。

Ⅲ. 鄧小平（胡耀邦＋趙紫陽）時代：日中関係の黄金時代

1989年4～5月、北京市内では民主化を求める大学生はじめ市民がデモを繰り返していた。鄧小平をはじめ保守派長老たちは、趙紫陽総書記に「戒厳令」発表を求めるが、開明派（民主派）の趙紫陽総書記はそれを拒否し、李鵬総理が19日発表したが、学生たちの反政府デモはさらに炎上し、ハンストーへ突入、それに対して、趙紫陽氏は天安門広場で大学生たちとの直接対話（危険だから撤退するように勧告）を試みる（25日）。 結局、趙紫陽総書記は共産党中央の意思決定の場から外され、鄧小平の指示に従って、中国人民解放軍部隊が天安門広場に進撃、武力制圧に乗り出し、多くの死者が出る（天安門事件）。

趙紫陽は追放され、2005年に亡くなるまで16年間も自宅に軟禁、その間彼は事件の経緯や自らの思いをテープに録音し、後ほど香港で出版。（『趙紫陽 極秘回想録 (上、下）～天安門事件「大弾圧」の舞台裏～』）

趙紫陽の対日観：1982年5月31日、日中国交正常化10周年で趙紫陽首相が来日。鈴木善幸首相との会談で「平和友好、互恵平等、長期安定」の日中関係3原則と経済協力、文化、人の交流強化で一致。

Ⅲ. 鄧小平（胡耀邦＋趙紫陽）時代：日中関係の黄金時代

胡耀邦時代の私の体験：

私にとってはこの時代は、「希望に満ちる黄金の時代」であった。

1981年9月、北京の中央民族大学に入学、哲学が専攻、「マルクス主義哲学」として政治色が強い。学生リーダー（クラスの班長）として、大学2年生の時（82年12月）に全学年では最初に共産党員になる

＊日本語を勉強していたため、日本に強い親近感を持ち、当時留学する日本人学生との交流が頻繁、週末には北京図書館の「日本文庫」（日本がODAで寄贈した書籍多数）に潜り込み、日本の哲学書をはじめ読書を楽しんでいた。クラス・メート達からは「日本通」と言われる。

＊1985年7月大学卒業（哲学士）、同年9月「中共北京市委党校」大学院入学、党建研究が専門。

87年卒業後は共産党中央機関に配属予定で政治家を目指していたが、

胡耀邦総書記の失脚で大きな衝撃を受け、その道を断念し、

方向転換して大学教員としての道を選択、

中国工運学院（中華全国総工会傘下の労働組合高級幹部養成大学）で専任講師、哲学や労働運動史を講義。

89年には天安門事件をきっかけに、大学の教職を辞め、日本留学の道を選択。

Ⅳ. 江沢民時代:「歴史認識」と対日外交

江沢民時代（1989～02年）:

＊中国は2001年にWTOに加盟、対外開放を積極的に進める。

＊鄧小平の【韜光养晦】の対外政策基調を維持、

＊外国企業の積極的な誘致、＊民間企業の積極的な育成（悶声発財）＝黙って金持ちを目指す）:拝金主義が蔓延る。

これが共産党幹部の腐敗の温床になる。

＊江沢民は1992年4月に田中角栄への見舞いも兼ねて訪日した際に天皇を中国に招待し、同年10月に明仁天皇・美智子皇后は訪中。

＊1998年には初めて国家元首として訪日し、両国は「日中共同宣言」を発表、「友好協力パートナー・シップ」関係を目指すとしていた。

一方、江沢民は、歴史問題を対日外交圧力の重要カードと位置付けており、『江沢民文選』によれば、1998年8月に外国に駐在する特命全権大使など外交当局者を集めた会議で、「日本に対しては歴史問題を永遠に言い続けなければならない」と述べたという。

Ⅳ. 江沢民時代:「歴史認識」と対日外交

江沢民は、鄧小平時代の対日関係の歴史的な遺産を継承しながら、独自の対日「歴史認識」外交を進めた。

その背景に何があったのか？

①天安門事件以降、共産党の求心力が低下、国民に対し共産主義思想による統制が弱体化。その代替策として「日本軍国主義復活論」(右翼化:確かに日本の右翼化が90年代後半に進行)を唱え、国民の視線を外部にそらず狙いがあったと思う。

②米中関係が安定:米国クリントン政権の対中国融和政策の背景のもと、江沢民は米国との対等な関係を目指すと同時に、対日観では、鄧小平の「日本に学べ」から中国優位(大国主義思想復活)思考に基づいた対日批判に転換したとみられる。

③江沢民自身の出身問題による対日強硬策に出たという側面

＊江沢民の実父・江世俊は大日本帝国時代の日本の傀儡政権の汪兆銘率いる南京政府のスパイ機関に勤務していた。そのおかげで江沢民は43年に南京中央大学に入学。

親は「親日派」とうい負の面を払拭するために、反日に強く出るのだろう。

これは韓国の朴槿恵元大統領と相似性がある

Ⅴ. 胡錦涛時代

胡錦涛時代（2002～12年）：

胡錦涛主席は、江沢民時代を引き継いで、対外平和外交（「和平崛起」）、対外経済　開放を促進。

08年5月に来日し「戦略的互恵関係」の包括的推進に関する『日中共同声明』に福田康夫首相と署名した。

72年の『共同声明』、78年の『平和友好条約』、98年の『共同宣言』に続く第4の政治文書。中国が日本の戦後の平和路線を評価する文言も盛り込んだ。

胡錦涛の対日観：

総書記就任前の胡錦濤が来日したのは2回。1回目は、1985年3月で、この時は共産主義青年団中央書記処第1書記として、中国青年代表団を率いての訪日であり、2回目は98年4月で、3月に就任したばかりの国家副主席の肩書きを付けての訪日であった。

この2回だけの短期の日本滞在で、胡の確固たる対日イメージが形成されたとは考えにくい。98年前半までの、胡錦濤の対日イメージは恐らく建国後中国共産党によって徹底された対日歴史教育の中で植え付けられた「侵略国としての日本」「資本主義国としての日本」というものであったと推察される。（中村楼蘭「胡錦濤・中国の対日外交」）

「胡家の系譜、生い立ちから、日本軍に対する胡錦濤の恨みや憎しみは計り知れない。・・・胡錦濤は戦後世代の指導者だから、日中戦争時代のしがらみがないということは決してない」と指摘（趙宏偉「胡錦濤の中国と日中関係」[補章I]、前掲『胡錦濤－21世紀中国の支配者－』、p.252～256）。

VI. 習近平時代：歴史の転換点と回帰

習近平時代（2012年～現在）

国内では、①反腐敗闘争を武器に権力を集中、共産党権力の強化（一元化領導体制）。

②「集団領導体制」を歪め、習による個人崇拝と独裁強化。

③憲法改正、国家リーダー終身制へ復帰（2018年3月全人代）。共産党第19期第６回会議（2021年11月8～12日）で、2022年度共産党第20期大会に向けた権力調整。

対外戦略と政策：

＊鄧小平以来の【韜光養晦】（平和外交）の路線から、大国外交、覇権外交、経済力による対抗外交と懐柔外交を展開（＝「戦狼外交」）

＊中国モデルを第三世界に輸出する（「一帯一路」戦略）。

＊中国式民主（全過程民主）を主張（西側民主主義より優れた制度）

＊軍備拡張を推進（台湾統一問題では、「平和統一」重心から「武力統一」重心に転換しつつある。＊経済力を背景に、対外的な政治的な浸透、経済的な浸透、文化的な浸透を強化（統一戦線工作）。

習近平が提唱する「人類運命共同体」の構築

中国首脳の言葉として初めて登場したのは2011年、当時の温家宝総理が東日本大震災の被災地を訪問した際、「自然災害の前で人類は運命共同体である」と述べた。中国では人類運命共同体が正式に登場したのは、胡錦濤前党総書記が2012年に中国共産党第18回全国代表大会で行った活動報告。2011年の『中国の平和発展』白書にて「運命共同体の新視点から人類の共同利益と共同価値観を探るべきだ」と記されている。

習近平党総書記は2017年12月、中国共産党と世界政党のハイレベル対話会の席上で、「人類運命共同体はすべての民族と国の前途に深く関わり、我々が生まれ育ったこの地球を仲睦まじい大家庭に建設すると共に、各国国民の憧れや夢を適えるものだ」と説明。2018年憲法修正時に、『中華人民共和国憲法』序言に盛り込む。

「中国人民の夢は各国人民の夢と相通じる。中国の夢の実現とは平和な国際環境および安定した国際秩序と一体となって，平和的発展の道を歩み，ウィンウィン関係を支える開放戦略を進めることである。私利私欲の追及を自制し社会への貢献を重んじる義の精神に立脚し，国際協力に基づく持続可能な安全な世界を樹立し，イノベーションを希求し，文明交流，自然に優しい生態系保持等を通じ，世界平和の建設者となり，国際秩序の保持に貢献する」。

＊中国式民主主義を主張（西側民主主義より優れた制度）

習近平政権が注力する民主主義と人権の再定義。

例えば、民主主義について習政権は「全過程の人民民主」という中国式の民主制度があり、「1つの国家が民主であるかは、その国家の人民が評価する」ものだと主張する。

世界にさまざまな民主化の過程やレベルがあることを想起するならば、「民主主義は多様であるべきだ」、「そこに暮らす人々の評価が大切だ」という論理。

習政権は現状を「100年に一度の大変動期」であり、

中国が国際社会での発言権を拡大するチャンスだと捉えている。

「ディスコース・パワー（話語権）」とは、発言する権利とその発言を相手に受け入れさせるパワー（権力）を含む言葉。

VI. 習近平時代：歴史の転換点と回帰

習近平は、米国に対して「平視」すべきであることを強調している。その意味から推理すると、米国を追従する日本は「見下ろし」の対象に過ぎず、同等な立場で見ようとしないだろうと私は思う。

近年では「戦後国際秩序の維持」という表現、これに挑戦するような行為は許されないとし、主に日本を批判するために使われている。2012 年 9 月の日本政府による尖閣諸島の国有化に対する外交部声明は、「国有化は歴史的事実と国際法を厳重に踏みにじるもの」との認識を示し、「日本の釣魚島問題に対する立場は、世界反ファシスト戦争勝利の成果を公然と否定する者であり、戦後国際秩序に対する重大な挑戦である」と批判。

外交を担当する楊潔チ国務委員も2013 年 3 月10日の記者会見において、日本側の行動は中国領土主権の厳重な侵犯であり、第二次世界大戦の結果と戦後国際秩序への挑戦であると批判。

山口信治「中国の国際秩序認識の基礎と変化」『防衛研究所紀要』第18巻第2号2016年2月、45-63頁。

VI. 習近平時代：歴史の転換点と回帰

ただし、米国との対立の中で、日本は戦略の面と経済の面でまだ利用価値があるので、対立は避けたいところだろう。

「習氏や中国指導者の対日観は日本軽視で、対日関係を改善しても意味がないと考えている。日中関係では、尖閣諸島周辺での中国公船の領海侵犯と、接続水域での接近行動の頻度と継続性が増している。5月の「一帯一路」国際会議で、習氏は二階俊博自民党幹事長や今井尚哉首相秘書官らと会見した。通常、隣席に座らせる側近中の側近である栗戦書（党中央政治局委員）や王滬寧は不在だった。習氏が対日関係を改善したくない証拠だ」。

井尻秀憲「党大会で『1強体制』固める習近平の『思想』と『対日観』新潮社フォーサイト（2017年12月02日） https://www.huffingtonpost.jp/foresight/xi-jinping-china_a_23196766/

＊結論的に、現在、中国の日本観は対等なパートナーとして見られない、という視点を持つことが重要である。

VII. まとめと結論：日中関係の問題点と課題

①歴史認識問題：日本の首相や政治家が靖国神社を参拝することに対する中国側の反発と批判。毛沢東時代はこの問題は出てこなかった。鄧小平時代にも一時期だけ中曽根総理に対する批判があった。江沢民時代からは中国の対日外交カードとして時時使っていたが、習近平時代では「歴史認識」問題が優先順位が低下。

②尖閣諸島の領有権問題：毛沢東時代は議題にも出てこなかった。

鄧小平時代は「棚上げ論」で抑えていた。江沢民時代から出てきて、胡錦涛時代に拡大し、習近平時代には強硬な対応に出ている。

③アジア地域での覇権争い問題（経済的な側面が強い）。

中国はそもそも日本経済力が強い時は、アジアにおける日本との覇権争い意識があったが、2010年頃以降（特に習近平時代）では、米国との大国外交（G2）と「平視」外交（対米優位論）の中で、日本に対しては「対等なパートナー」として見ていないし、「ジャパン・バッシング」から「パッシング」、さらに「ナッシング」に向うだろうと思われる。

④米中対立と安全保障問題：米中「新冷戦」のなか、日本側は日米同盟を強化、中国は①と②を今後も繰り返す可能性がある。

③に関しては対日優位意識と対日不信感を更に強めてい行くだろう。

参考文献：

- 李 鋼哲（2021）「私が体験した中国現代史」INAF第2回研究会発表(http://inaf.or.jp/youtube/1341/)
- 城山 英巳（2021）『マオとミカドー日中関係史の中の天皇』白水社
- 石川 禎浩(2021)『中国共産党、その百年 』筑摩選書
- 馬場 公彦(2021)「戦後日本の「中国観」 共感・支持の時代を経て悲観・独裁批判一色に」NIPPON.COMシリーズ・結党100年の中国共産党と日本（4）：政治・外交 社会 (https://www.nippon.com/ja/in-depth/d00719/)
- 水羽　信男「毛沢東の統一戦線論：1935 ～ 1937年を中心として」石川禎浩編『毛沢東に関する人文学的研究』京都大学人文科学研究所, pp. 33-55, 2020
- 井尻 秀憲（2017）「党大会で『1強体制』固める習近平の『思想』と『対日観』新潮社フォーサイト https://www.huffingtonpost.jp/foresight/xi-jinping-china_a_23196766/
- 相馬 勝（2015）『習近平の「反日」作戦　中国「機密文書」に記された危険な野望』小学館
- 伊藤 正（2012）『鄧小平秘録』（上、下）文春文庫
- リチャード・マグレガー著小谷まさ代訳（2011）『中国共産党：支配者たちの秘密世界』草思社
- 趙 紫陽、 バオ・ブー／ルネー・チアン／アディ・イグナシアス、河野純治訳（2009）『趙紫陽極秘回想録 (上、下）
- ～天安門事件「大弾圧」の舞台裏～』
- スーザンL.シャーク著徳川家広訳（2008年）『中国：危うい超大国』NHK出版
- 中村 楼蘭（2004.2)「胡錦濤・中国の対日外交」『帝京国際文化』第 17 号
- 愛知大学国際問題研究所編（2004）『中台関係の現実と展望』東方書店
- 林 暁光著〈2003〉「党的第三代領導集体与跨世紀的中国対日外交」『中共党史研究』総第93期〈2003年第3期〉
- 趙　宏偉（2003）「胡錦濤の中国と日中関係」［補章II］、楊中美著・趙宏偉監修・青木まさこ訳『胡錦濤－21世紀中国の支配者－』NHK出版
- 田 桓主編（2002）『戦後中日関係史1945－1995』中国社会科学院出版社
- K. A. ウィットフォーゲルの中国革命論
- 川島真「習近平政権の国際秩序観–国際政治は国際連合重視、国際経済は自由主義擁護」SSDP 安全保障・外交政策研究会の「提言・論考」
- 山口信治「中国の国際秩序認識の基礎と変化」『防衛研究所紀要』第18巻第2号2016年2月、45-63頁。

- ご清聴ありがとうございました。